

中学校における教師と生徒の運動会への関わり方に関する研究

コーチング科学研究領域

5022A005-9 伊原 茜

研究指導教員：土屋 純 教授

【序章】

＜本研究の目的＞

本研究では、運動会に対する教師や生徒たちの関わり方を明らかにすることを目的とする。

＜本研究の課題と方法＞

本研究の課題は3点挙げられる。

1つ目の課題は、運動会の制度的位置づけや近年の議論の動向から、現代的な運動会の実践上の課題や困難を明らかにすることである。それらを明らかにするために、学習指導要領や史資料を用いて文献研究を実施した。

2つ目の課題は、運動会に対して教師および生徒がどのように向き合っているのかを明らかにすることである。運動会を実施する主体である生徒やそれをサポートする教師の実態を明らかにするために教師および生徒を対象に、観察調査やインタビュー調査を用いたフィールドワークを実施した。

3つ目の課題は、運動会に対して生徒がどのような感情を有しているのか、学校への感情や運動への感情から明らかにすることである。それを明らかにするために、運動会の前後で生徒を対象とした質問紙調査を実施した。

【第1章】

本章では、運動会という学校行事が日本でどのように導入され、形成されていったのか歴史的展開や制度的位置づけを踏まえ、近年の議論の動向から運動会の現在地を明らかにすることを目的とした。

運動会の萌芽期においては、1874年に海軍兵学寮で実施された「競闘遊戯会」をはじめとした、エリート学校におけるレクリエーションの目的で行われていた。1880年代以降、学校の中で運動会が実施されるようになり、学校行事へと変化してい

った。また、学校ごとに自校の校庭で運動会が実施されるようになり、地域とのつながりが深まっていった。

このように、運動会は学校教育の位置づけにありながらも地域の祭りのような性格を有するという日本独自の学校行事として発展を遂げていったことが明らかになった。

次に、運動会の制度的位置づけについて確認した。学習指導要領が策定された試案段階では、明確に教育課程に位置づけられていなかったものの、1958年の改訂では「学校行事」として「特別教育活動」などと並んで位置づけられるようになった。また、1969年の改訂以降は「特別活動」の中に生徒会活動や学級活動と並んで、学校行事が位置づけられるようになっていった。現行の学習指導要領においては、学校行事の中でも「健康安全・体育的行事」のうちの1つの例として「運動会」という名前が挙げられているが、必ずしも運動会である必要はないということであった。

しかしながら、運動会や運動会のような行事は約97%の学校で実施されており、ほとんどの人が経験したことのある学校行事であるといえる。その運動会は新型コロナウイルス感染症の流行以降、大きく形を変える必要に迫られた。感染症対策のために、当日の競技時間および準備にかかる時間が減少しており、全体的な縮小化の傾向が窺えた。

一方で、感染症対策への制限が解除された2023年度においても、縮小化の傾向は続いていた。その理由としては教師の「異動」や「過重労働」、気温の上昇による熱中症予防や運動会での災害事故などについても関係していることが示唆された。

【第2章】

本章では、公立中学校2校でのフィールドワー

クで収集したデータを元に学校現場で教師や生徒がどのように運動会に関わっているのかを明らかにすることを目的とした。

教師が意識していることや考えていることとしては、主に3点挙げられる。1つは運動会の縮小化に対して、現状を踏まえて「やむを得ない」と考えていることである。一方で、運動会の準備期間が短縮されることについては、本来得られるはずの教育効果が十分に発揮されないという懸念を抱いている教師も存在していた。

2点目は、運動会を異学年が集い、上級生の姿を見て学ぶことができる貴重な機会であると捉えていた。特に、生徒の取り組みが運動するという行動で現れるため、生徒の行動が可視化されるという点で他の学校行事とは異なる教育効果があると考えていた。

3点目は、体育授業と運動会の関連について、体育で学んだ技能を発揮することだけでなく、普段の授業における指導方法によって、生徒の運動会練習への取り組み方に変化がみられることが示唆された。

他方で、運動会の企画・運営を担う生徒が意識していることや考えていることに着目した。教師の要請などでその役割についた生徒は、運動会の目標として「怒られないようにする」など自分自身に関わる後ろ向きな理由を挙げていた。一方で自ら立候補した生徒は「みんなが楽しめるようにする」などの全体のことを考えた発言が目立っていた。また、 β 中学校では運動が苦手と自負している生徒が運動会においてもクラスをまとめる役割を担っていたが、運動が得意ではないからこそ伝わりやすいこともあると考えており、教師もそうした生徒が主導することについて新たな可能性を感じていた。

他にも、発達に何らかの課題を抱えている生徒にとっての運動会の意義や運動会を実施する時期の効果についても言及されていた。

【第3章】

本章では、運動会に対して生徒がどのような感情を有しているのか、学校への感情や運動への感

情から明らかにすることを目的とした。事前調査の結果から、 α 中学校、 β 中学校の両校ともに多くの生徒が運動会に対し肯定的な感情を抱いていることが明らかになった。また、運動会への感情に影響を与える要因としては、 α 中学校では学校全体因子と統制感因子、 β 中学校では友人関係因子と学校全体因子で有意な関連がみられた。

事後調査の結果から、 α 中学校、 β 中学校ともに自分自身が競技を「する」こと、他者を「みる」ことや「応援する」こと運動会での印象的な場面として捉えていた。こうした結果から、全校生徒が揃う運動会では、生徒たちも「みる」ことに対し主体的に取り組んでいることが推察された。

【結章】

本研究では、運動会に対する教師や生徒たちの関わり方を明らかにしてきた。

教師からは「縮小化しなければ運動会を実施するのは難しい」という切実な実態が窺えた。一方で、運動会に対して多くの生徒が肯定的に捉えているものの、その関わり方については限定的なものであったといえる。先行研究では、生徒たち自身の思いや願いを反映し、運動会を自治していくことが重要であると述べられていた。しかしながら、本研究では教師が中心となっていたため、生徒が運動会の運営をさらに担っていくことができれば教師の負担も減少し、且つ教師の「異動」などによって伝統が継承できないという課題の解決につながる可能性が指摘できる。

本研究の限界としては、フィールドワークでデータを収集したが、短期間のフィールドワークにとどまったため、特に運動会に対して否定的な態度を示す生徒の実態や他教科の教師について深く考察することが難しかった点が挙げられる。長い期間をかけて学校現場に入り込んだ上で信頼関係を築き、運動会を嫌悪している生徒の実態や保健体育科の教師以外が考えていることや感じることにについて明らかにすることを今後の課題とする。